

## 内村鑑三における、宗教と言語

内村鑑三は明治～大正期にかけての日本を代表する、キリスト教指導者である。仏教が日本において日本独特の発達をし、いわゆる鎌倉仏教を生んだのと同じように、彼から始まる無教会主義キリスト教のグループは、日本独特の発達の仕方をしたキリスト教として、海外からも注目されているほどである。それではその内村のキリスト教の特徴としてどのようなことが挙げられるであろうか。

『聖書之研究』という名前を持つ雑誌を創刊したことからわかるように、内村の信仰の中心はあくまでも聖書であった。そういう意味では内村の信仰はまさに聖書主義であり、徹底したルター的なプロテスタンティズムであるとも言えるであろう。しかし、内村のキリスト教観には、単なる聖書主義では済まされない要素が含まれている。

内村はそのおよそ40年に渡る伝道活動を通じて、数多くの著作を残している。それらの著作には日本語で書かれたものも、また英語で書かれたものもあるが、いずれも言葉・言語により表現されたものである。そして内村は、著述を伝道活動の中心的手段のひとつとしたことにより、集会を通じた伝道活動だけでは不可能な広い範囲にまでメッセージを送り続け、強い影響力を持つことができたとも言える。例えば当初英語で書かれた『余は如何にして基督信徒となりし乎』や『代表的日本人』は、その後ドイツや北欧諸国でも翻訳出版されている程である。

しかし、著述活動を続けていたからといって、彼はキリスト教の全てが言語によって表現・伝達可能であると考えていた、というわけではない。寧ろ、内村は言語表現の限界を意識していた人物だったのである。その現れの一つとして、例えば彼の体験主義を挙げることができる。内村は、現代であれば実体験・実経験などと呼ぶであろう事態のことを、「実験」と呼んでいる。そして宗教とは、いくら聖書等を研究し、智識を増やしたところで、「実験」を通して理解しようとしないう人間には決して理解できないものである、と言うのである。彼自身の言葉を引用してみると（傍点は筆者）

危険なるものにして学生の信仰のごときはあらず。彼らは容易に信じまた容易に疑う。来ること速やかにして去ることまた速やかなり。伝道師を失望せしむる者にして学生、ことにわが国今日の学生のごときはあらざるなり。しこうしてその理由はこれを発見するに難しからざるなり。彼らは主として読書の入にて労働の入にあらざればなり。彼らは脳裡に宗教を了解せんとして、生涯にこれを実験せんとせざればなり。<sup>1</sup>

となる。内村はここでは読書よりも実験、すなわち生涯を通して経験することを重んじているのである。

但しここで注意しておかなければならないことは、内村は必ずしも「一つであること」にこだわる考え方をしない、ということである。「二つのJ」の場合もそうであるし、彼の道徳についての見解においてもそうである。JesusとJapan、この二つのJはどちらも彼にとって重要なものであり、彼は「どちらをより愛するか知らない」と言う。また道徳についても、「民の道徳には無上の価値がある」と言う一方で、人は道徳では救われぬとも言ふ。一見矛盾するようなそれぞれの主張には、当てはめるべきそれぞれの場面があるのである。「実験」を主張し、「読書」によって「脳裡」で理解することをここで批判しているからといって、彼が読書を全否定しているわけではない。しかし、キリスト教は読書だけでは理解できない、と彼が考えていることは間違いない。言語は重要であるが、人間に何かを伝え、学ばせるのは、言語だけではないのである。内村が札幌でキリスト教に触れた際の心情を記した有名な個所から引用すると、

新しい信仰によって与えられた新しい霊的自由は、余の心と体とに健全な感化を与えた。余の勉学はよりいっそうの集中をもって行われた。新しく賦与された肉体の活動力を受けて、余は山野を跋渉し、谷の百合、空の鳥を観察し、天然を通して天然の神と交わらんことを求めた。<sup>2</sup>

とある。内村はキリスト教信仰から得た新たな活力によって勉学に励みつつ、一方では自然の美を再発見したのである。ここにおいても、学問的知識と、美の「実験」とが同時に現れているのである。<sup>3</sup>内村の「勉学」の対象は主として自然科学であり、そこでは自然を研究対象たる単なる物体として考えるはずである。しかし内村は同時にその自然に改めて美を見出したという。相矛盾しかねない二つの要素は、ここでも同時に現れているのである。<sup>4</sup>

なお、この「実験」という言葉について、明治時代の国語辞典「言海」では、「実験：まことのためし。正（まさ）しく試みること。（理論に対する）」との釈義を与えている。これは科学者として、（現代用いるような意味においての）実験を繰り返すやり方で教育を受けた内村独特の用法であるというわけではなく、一般的な用法として存在していたのである。同時期のキリスト教指導者海老名弾正も、実経験・実体験という意味での実験という表現を多用している。

次に、内村の具体的な聖書箇所を解釈を通して、彼の言語観がどのようなものかを確認していきたい。聖書において、言語、ことば、と云えば、思い出されるのはヨハネ伝冒頭の箇所であろう。内村もまたこの箇所についての考察を残している。それが明治38 / 1905年「世界最大の言辞（ことば） 約翰伝第一章第一節の黙考」<sup>5</sup>である。

「太初に道在り、道は神と偕に在り、道は即ち神なり」、内村が「完全に註解し得る聖書学者は全世界に居らない」と言う通り、確かに難解な語句である。ではこの箇所についての内村の解釈はいかなるものであろうか。続けて以下に引用する。<sup>6</sup>

道在り、道（ことば）とは何である乎、道は読んで字の如く道理ではない、道理は理であつて死んだものである、然し茲に言ふ道とは神と偕に在りて神であるといへば、活きたる、而かも性格を備えたる者である、然らば「ことば」とは何であるか、「ことば」は英語のエクスペッションである、即ち思想の表顕である、見えざる霊の外に現はれたるものである、言語（ことば）は音響を以てする思想の表顕である、...心の中に隠れたる思想を外に顕はす総ての手段を、之を称して「ことば」といふのである<sup>7</sup>

内村は「ことばとはエクスペッションだ」というのである。そして例を挙げ、ミルトンの言葉は詩文であるが、ミケランジェロの言葉は彫刻、ラファエルの言葉は絵画であると言う。「心を外に顕はすもの、是れが即ち『ことば』」であり、表現である。このような考え方をする内村が、言語表現で全てが理解できると考えないのも無理はないことではないか。内村は続ける。

...彼（神）にも亦思想があり、愛があり、智慧があり、権能があるから、彼も亦之を顕はすために「ことば」を要する...<sup>8</sup>

では、神の言葉とは何であろうか。

...言語も勿論必要である、聖書の如きは実に其意味に於て神の「ことば」である、然かし言語だけでは足りない...言語に添ふに何にか実物が要る、爾うして天然が斯かる実物であつて、又実物を以て神の心を顕はす彼の「ことば」である、岩も木も、動物も、人類も、皆な神の心を伝ふるための「ことば」である、我儕は謹んで之を読んで神の聖意を悟らなければならない。<sup>9</sup>

ここにはイギリス自然神学的な流れが見うけられる。聖書が神の言葉を伝える書物であるように、天然(自然)も神の言葉を伝えるものとして「読む」ことができる、と言う表現は自然神学的「第2の本」の発想であろう。

では、このいわゆる「第2の本」的な発想を、内村はどこでどうやって身につけたのであろうか。

内村が体系だった教育を受けたのは、主として札幌農学校入学後である。もちろんそれ以前にも体系的教育をうけていなかったわけではなく、少年期には高崎で藩校に通っていたような記録があり、また上京後は私塾(鈴木俊郎はこれを有馬学校であろうとほぼ断定している)や東京外国語学校の英語科(その後分離独立して東京英語学校となり、さらに東京大学予備門と改称)で主として英語を学んでいる。<sup>10</sup>しかしここで注目すべきはキリスト教と学問的・自然科学的知識との関わりであるので、これらキリスト教と出会う以前の教育について特別に考慮する必要はないであろう。札幌農学校以前においては寧ろ、主として高崎在住時、少年内村が上州の豊かな自然に触れることにより、生命・生物(特に魚類)への強い思い入れを抱くに至ったことの方が重要であると考えられる。

その後内村は札幌において、キリスト教と近代的自然科学の両方を学ぶことになる。となれば、少年時代から抱き続けてきた自然への思い入れと、キリスト教信仰とが結びつくのは札幌農学校時代ではないか、と推論することも可能なのではないか。もっとも、札幌農学校で教えられていた学問の内容は、あくまでも一般的な自然科学であった。確かに初代教頭クラークは伝道に対しても非常に熱心であり、時の北海道開拓長官黒田清隆を説得し、聖書による道德教育を彼に黙認させたほどである。しかし黒田が認めたのも道德教育という範囲内のことであり、官営の札幌農学校で教えられた学問・学課それ自体の中に、宗教的要素が含まれていたわけではない。学問は学問、キリスト教はキリスト教として、それぞれ別に伝えられたと考えてよいであろう。事実、内村らの世代以後、札幌農学校の学生の多くがキリスト者になったということもなく、有名な「イエスを信ずる者の契約」にしても、そこに署名しているのは第1期生、そして内村ら第2期生だけである。その後新たな名が書き加えられることはなかったのである。しかし、学問とキリスト教とを同時期に同じ人間たちから学んだことにより、これら二つの要素がスムーズに結びついたであろうことは充分にあり得ることであるかもしれないだろう。

その後内村は米国アマースト大学に留学し、再度高等教育を受けることになる。留学1年目、アマースト大の3年級に編入した内村は、ドイツ語、史学、聖書文学を学んだ。なお、この聖書文学という科目は、日本からの留学生内村のために特別に設定された科目であった。そのため学生は内村一人であり、彼はフィールズ教授と一対一で有神哲学論、旧約史、聖書研究論のテキストを読み、さらに比較宗教学に詳しいフィールズ教授と「宗教上の討論会」を持ったという。<sup>11</sup>また2年目の4年級在籍時には、鉱物学・地質学、ヘブライ語、心理哲学、倫理哲学を学んだ。内村は『余は如何にして基督信徒となりし乎』の中で、「地質学と鉱物学とを哲学より以上に好んだ」「結晶学は余にそれだけで一つの説教であった」<sup>12</sup>と記しており、これらの中で最も内村の心を捉えたのは地質学・鉱物学であったようである。なお内村はここで結晶学を説教に例えてはいるが、当時のアマースト大の地質学・鉱物学教授エマーソンは、科学と宗教とを分離して考える学者で

あり、進化論者でもあった。<sup>13</sup>アマースト大はニューイングランドの中でも、特に伝統を重視する大学であり、内村の二度目の回心において導師的な役割を果たした総長シーリーもまた保守的信仰の持ち主であったのだが、彼は教授陣に対しては完全な思想・表現の自由を与えていたのである。そういった、物事を強引に一つの枠にあてはめようとはしない姿勢は、先に挙げたような内村の多層的な物の見方とも調和したのである。

以上のような、少年時代から青年時代への学問・体験を経て、内村は科学と宗教・聖書のどちらか一方だけを選ぶのではなく、また全くの別物と考えて分離させてしまうのでもない、独特なやり方で彼の内に宗教と科学とを共存させることができたのである。

そのような内村の論は、自然賛美と、それを通しての神賛美ということにはとどまらない。神がみずからの思想を表現する為には、言語であり書物である聖書と「第2の本」である天然（自然）、それらをあわせてもまだ不足であると考えているのである。

然しながら神の深遠限りない思想を顕はすためには聖書と天然では猶ほ不足である、神を表出する者は言語以上、天然以上のものでなくてはならない、神は自己を顕はすために自己に似た、而かも自己を離れたる、或る実在者を要する、是れ即ち聖書に謂ふ所の神の栄の光輝、その質の象徴（希伯来書一章三節）でなくてはならない、即ち我を見し者は父を見しなりと言ひ得る者でなければならぬ（約翰伝十四章九節）...此「ことば」は言語以上、即ち言語を発するもの、天然以上、即ち天然を造つた者でなくてはならない（哥羅西書一章十二節）<sup>14</sup>

神は言語以上、天然以上の存在である。上位存在の全てを、その下位存在だけで表現し切れるはずがない、という主張である。

「道」は少なくとも性格（personality）を備えた者であつて、人に似、又神に似たる者でなくてはならない。

道は神と偕に在り、此ペルソナ性を有したる「道」は神と偕に在りたりとのことである、神の何者である乎は聖書は決して之を説明しない、そは神は何よりも最も知り易い者であるからである、  
...<sup>15</sup>

以上の引用部から、内村はヨハネ伝の一章一節を読んで、「神の思想を充分に表現するには、具体的な personality を持ち、神に似、しかも人にも似た存在が必要不可欠である」と考えたのである、と推察できるだろう。もちろんその「存在」とは神人イエスを指すのである。神のことばとは、聖書であり、天然であり、そしてイエスである。これら全てが神のことばなのである。

先ほどの引用部において、内村は「神が知りやすい者である」と言っているが、これは誤解されかねない、ある意味過激な発言であろう。神を知る、ということ、を、「神ということを知る」「神とは何かを知る」ととらねば、これは大変な問題である。「神」の定義に一生を費やす神学者もいるであろう。内村が言いたいことはそういうことではなさそうである。

...創世記第一章第一節に、「元始に神天地を造り給へり」とありて、神は既に在る者として記されてある、宇宙在ての神ではなくして、神あつての宇宙であるから、万有何者を以てしても神の何たる乎を説明することは出来ない、神は実に実在の原理（The First Principle of Existence）で

ある、神は在つて在る者の中で最も確実なる者である。<sup>16</sup>

神は定義・説明といった行為総ての根源である。それをいかにして説明するというのか、というのである。説明できるものではない、ということはつまり、神とは「わかる」、「理解する」、というやりかただけでは捉えきれない、ということなのではないか。その説明しきれずそれ故捉え切れない部分は、それこそ天然を感じ、「実験」を通して「知る」のだ、ということではないのだろうか。

しかし一般的に考えれば、何か思想を表現から理解しようとする時、恐らくはつきりと言葉になされた表現でさえ、そこには受け手による理解の差が存在するだろう。内村が先に挙げたような「絵画」「彫刻」「詩文」などであれば、さらに思想の表現は直接的ではなくなる分、一步退くのであるし、自然をメッセージとして解釈するとなれば、さらにそこから何かを理解しようがそこには差が生じる、それは当然の事である。受け手各自の眼の持ち方によりそれは異なってくるはずだからだ。

聖書が神の言葉たり得るかどうかは受け手にかかっている、という考え方は、もちろん内村独特のものではない。例えばルドルフ・ブルトマンも

...「言葉」という言葉の元来の意味に立ち返るなら、言葉は語る者の外にある事態に関わるものであり、そのとき言葉は聴衆にその事態を闡明する語りかけとして聴者にとっての出来事となる。...ほかならぬ、言葉においてイエスは赦しをもたらすのである。<sup>17</sup>

と述べ、聖書が聖書たり得るかどうかは受け手の決断にかかっている、という見解を示した。ここには内村の立場とある程度共通した要素があると言えるだろう。しかし、ブルトマンが言う「決断」が、人間の側の強力な意思・主体性を前提としているように思われることと比較すると、内村の場合は、人間の立場がより受動的であり、あくまでも神が主で、人間は従である。例えば内村は『余は如何に』の中で、アマースト大シーリー総長の教えを回想し、

...神は我々の父にいまし、我々が彼について熱心であるにまさって我々に対する愛に熱心でありたもうということ、彼の祝福は宇宙にあまねく発射しているので、彼のみちみちているものが『とびこむ』には我々はただ我々の心を開きさえすればよいということ、我々の本当の間違ひは、神御自身のほかには何びとも我々を潔くすることはできないのに、我々が潔くあろうと努力するそのことにあるということ、本当に自分自身を愛するものは先ず自分自身を厭いそして他人のために自分自身を与えるべきであるから、自己主義は本当の自己の憎悪であるということ、等々、等々、以上のような、また他の貴重な教訓を、総長先生はその言葉と行為とによって教えてくれた。<sup>18</sup>

と述べている。もちろん「神のみちみちているもの」に「とびこむ」べく「心を開く」のは、人間の意思にかかっていることではある。しかしその一方で内村は、神が必ず我々が心を開くよう導くはずだ、とも考えているのではないか。そして内村は、人間が無力な存在である一方で、人間を愛し導く神は完全な存在であると考え、それゆえ、神の被造物である天然（自然）に対しても強い信頼を抱いていて、それゆえ誰でも同じ「真理」を自然から感じずにはいられないはずだ、と考えるのではないだろうか。内村が聖書は人生の「実験」により「わかる」はずだ、と断言する時にも、そこには同じような、神に導かれての人間の体験というものへの強力な信頼があるように思われる。

内村は大正13/1924年「日本の天職」の中で「彼ら（英国人）は私ごときを神秘家（ミスティック）と呼ぶ<sup>19</sup>」と書いている。内村自身は自分が神秘主義的であるなどとは思っていないのだろうが、経験すればわかる、自然の風物から神の意志を読み取る、といった言い方には、確かにそういう響きがあるわけである。内村の言語表現については、厳密な定義なしに言葉を用い、明確に整理せずに概念を用いるなど、自ら誤解の元を生み出しているようなところもあり、また特にその論理的一貫性については確かに問題がある。しかし「実験」を通せば必ずわかるはずだ、と信じながらも、他者に伝えるには言語でしか表現できないもどかしさ。内村はそれを感じていたのではあるまいか。大量の著作を残しながら、実験を伴わない言語表現・文章表現は信じられない、というある種皮肉な要素が内村にはあったのである。それでも彼が著作活動をやめなかったのは、ここまで見てきたように、神と、神に導かれた人間の「感じる力」とに対する強い信頼があったからではないだろうか。

---

1 「学生の信仰」明治39(1906)年『聖書之研究』81号岩波書店刊『内村鑑三全集14』322～323ページに収録。この言葉は322ページより引用。

2 『余は如何にして基督信徒となりし乎』鈴木俊郎訳、岩波文庫 26ページ。

3 内田芳明は著書『現代に生きる内村鑑三』（岩波書店、1991年）の中で、このこと注目し、これを非常に特徴的なことであると述べている。迷信から脱するとは脱宗教であり、世界が新しく見えるようになったとは新たな宗教的意味付けであって、それは宗教へと突入する事である。内田は、そのことが同時に起こったというのはある種奇怪な事だとささえる。

4 鈴木俊郎は、札幌農学校での同級生宮部金吾が、自然に神を見出そうとする内村の学問が純粹に「科学的」ではないことを見ぬいていたという。宮部もまたキリスト者であるが、彼の「科学と宗教」問題の捉え方は、内村のそれとは異なっていたのである。

5 「世界最大の言辭（ことば） 約翰伝第一章第一節の黙考」明治38（1905）年『聖書之研究』63号。『内村鑑三全集13』135～140ページに収録。

6 この段落における内村の言葉は全て『内村鑑三全集13』135ページより。

7 『内村鑑三全集13』136ページより。

8 『内村鑑三全集13』136ページ。

9 『内村鑑三全集13』136～137ページ。

10 これ以降の内村の伝記的事項については、主として鈴木俊郎『内村鑑三伝』（岩波書店、1986年）を参照した。

11 『余は如何にして基督信徒となりし乎』156ページ。

12 『余は如何にして基督信徒となりし乎』136ページ。

13 前述『内村鑑三伝』673ページ。

14 『内村鑑三全集13』137ページ。

15 同上。

16 同上。

17 R. プルトマン「イエス」、『プルトマン著作集6 イエス・原始キリスト教』（八木誠一、山本泰生訳、新教出版社、1992年）173ページ。

18 『余は如何にして基督信徒となりし乎』158ページ。

19 「日本の天職」大正13（1924）年『聖書之研究』292号『内村鑑三全集28』400～408ページに収録。この言葉は406ページより引用。